

感知融合の道德教育

土屋 康子

【第1章 研究テーマ設定の理由 要旨】

中央教育審議会の答申を踏まえ、従来の「道德の時間」が「特別の教科 道德」（以下「道德科」として新たに位置付けられるとともに、「考える道德」、「議論する道德」（以下「考え、議論する道德」）への転換が図られることになった。

従来、我が国の学校教育は、各教科等において情意や態度等に関わる資質・能力を育む豊かな実践が重ねられてきた。道德の時間においても、同様に、道德性を育成する上で、心情理解は有効な手法とされてきた。

教材を通して登場人物の心情を「読み解く」、「読み取る」、「解明する」などの「理解」を強く求めた認知的側面（知性）に偏った形式的な指導は、確かにあったかもしれない。しかし、心情を「推し量る」、「想像する」、「共感する」といった情意的側面（感性）に働き掛ける充実した指導が行われていなかったわけではない。

重要なことは、今後の道德教育において、「認知的側面の重視」¹と同時に、心の教育であるからこそ、「情意的側面の重視」も変わらずに実践していくことである。

つまり、子供たちの心の活力を沸き立たせる道德教育の推進・充実に当たっては、「認知的側面」、「情意的側面」に偏ることなく、両側面をバランスよく指導していくことが必要なのである。

本研究のテーマは、感性と知性を調和・融合した道德教育の創造が時代の要請であると考え、麗澤大学大学院高橋史朗特任教授が提唱する「感知融合の道德教育を構築する必要性」²の理論に基づき、「感知融合の道德教育」とした。

研究の目的は、道德性を育む幼児期における活動及び、児童期における道德科授業の開発・実証を通し、変革期に求められる「感知融合の道德教育」の具体化を図ることである。研究の方法については、以下の通りである。

- (1) 先行研究：「感知融合の道德教育」の骨格となる理論及び感性、情動、共感性等に焦点を当て、脳科学及び心理学等の科学的知見から、課題を明確にする。
- (2) 基礎研究：先行研究を基に、道德性の芽生えから道德性の発達に関して、「感知融合の道德教育」の視点から体系的に捉え直すとともに本研究の視点を見いだす。
- (3) 調査研究：保育者、保護者を対象とした質問紙調査及び、インタビューによる聴き取り調査を実施し、その結果を分析し、本研究の視点を明らかにする。
- (4) 実践研究：人権教育と関連させた道德教育、心に響く道德授業及び活動等について、基礎研究・調査研究で見いだした本研究の視点及び「感知融合の道德教育」の視点から検証する。課題を明確にし、新たな活動及び授業等の開発につなげる。
- (5) 「感知融合の道德教育」の具体化：「感謝の心の育成」に向けたカリキュラム・マネジメントの構築、「感動する心・畏敬の念の涵養」に向けた活動及び道德科授業の開発に取り組み、実証する。
- (6) 研究のまとめ：研究結果について考察し、今後の課題を明確にする。

先行研究は、1 感知融合の道德教育論、2 感性及び感性教育の研究、3 共感性及

び認知に関する心理学・脳科学研究、4 情動の科学的解明と教育等への応用に関する研究、5 知情意のメカニズムと道徳性の発達に関する研究 に関する文献研究である。

【第2章 道徳性育成に関する基礎・調査研究 要旨】

以下の基礎研究から、道徳性の育成に関するキーワードを見いだした。

1 教育・保育要領及び保育指針から幼児教育が目指すキーワード

学校の本分は、「子供の興味や関心」を原動力とする教科学習指導であり、園の本分は、その「興味や関心をもつようになる」ための援助である。これまで学力として重要視されていた認知能力に加えて、非認知能力が、かつてないほど強く求められている。「非認知能力」とは、「社会情動的スキル」とも言われ、その中核は「自己と社会性」に関わる心である。

教育・保育要領及び保育指針の改訂内容や方向から明らかにされたのは、「非認知能力の育成」であり、そのためには**様々な体験及び対話を通した人との豊かな関わり**が必要である。

2 科学的知見から道徳性の芽生えを育むキーワード

非認知能力の基礎ともいえるべき「道徳性の芽生え」について、科学的知見からは、どのように解明されているのか、高橋は、「大脳新皮質系からの神経伝達物質には抑制的物質が圧倒的に多く、この抑制物質によって、脳は常にブレーキを少し踏み込んだ状態で機能している」とし、「我欲の抑制は徳であり、道徳の基本である。」³と述べている。我欲の抑制である徳は、非認知能力のメタ認知に重なる。メタ認知とは、自らの認知（考える・感じる・記憶する・判断する等）を認知することであり、自我抑制、自己統制と重なる。道徳性の芽生えを育むには**自己調整力・自己統制力の涵養**が重要である。

3 国の報告・計画等から地域・家庭との連携を図るキーワード

道徳性の育成に向けて、道徳教育を推進・充実させるには、学校と地域及び家庭との連携は欠かすことができない。子供たちに、発達段階に応じた体験を通して、その時代が求める力とともに、普遍的な力も育もうとしている。

時代に応じて、学校、地域及び家庭が、それぞれの役割に応じた**体験を設定**していくことが期待されている。

4 道徳性の発達に焦点を当てた長期追跡研究からのキーワード

OECD保育白書において、「生涯にわたる well-being や社会的成功は、乳幼児期に『非認知』的な心の土台がしっかり養われてこそ、長期的、持続的に可能になる。」と記されている。「道徳性の芽生え」を育むには、乳幼児期の子供への指導、援助がいかに重要であるかを、科学的に説明している。子供にとって、家庭教育を基盤とし、周囲の大人が存在や愛着、身近な**人との豊かな関わり**等が、その後の対人関係や生き方に大きく影響することが、科学的に明らかになった。

5 「絶対的な人生肯定の哲学」から生き方のキーワード

筆者が影響を受けた思想は、ヴィクトール・エミール・フランクルが提唱する「絶対的な人生肯定の哲学」である。諸富祥彦は、フランクルの考えは、人間を本当に幸福にする「絶対的な人生肯定の哲学」とし、フランクル心理学を「絶対的人生肯定法」

名付けている。⁴この「人生肯定」に関する著書を読み解くことで、人間のもつ**レジリエンス（回復力）**の素晴らしさに触れることができる。フランクルの提唱する「ロゴセラピー」とは、ロゴス（癒し）の意味がある。フランクルが創始した精神療法で、生きる意味を見だし、人生を紡いでいくことを支える治療法である。自分の人生に意味を見いだそうとする意志は、人間の根源的な原動力であると考えられたのだ。

またフランクルの生き方に、アンドリュー・ゾッリが、著書『レジリエンス 復活力』で定義している「極度の状況変化に直面したとき、基本的な目的と健全性を維持する能力」、「**自己統制力**」を見いだすことができた。

以上、基礎研究において、科学的知見に基づく先行研究を整理するとともに、道徳性の育成を構造的に捉えることができた。

調査研究は、「質問紙調査及び聴き取り調査」を「多変量分析（因子分析）及びテキストマイニング分析を活用した結果分析」に取り組んだ。

<調査問題1・2>は、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育部会資料の「幼児教育において育みたい資質・能力」に関する問題であり、多変量解析の「因子分析」を活用した結果から、考察した。保護者・保育者の意識を支えるものは、概ね5視点『主体的な探究・創造』『感覚・気付き』『個性あふれる表現』『友達との対話や協働』『人との豊かな交流』と捉えられた。

<調査問題3>「保育所における道徳性の芽生えに関する調査研究Ⅱ」（子どもの領域研究所）に基づいて作成した問題も、多変量解析の「因子分析」を活用した結果から、考察した。保護者・保育者の意識及び行動を支えるものは、概ね5視点『個の尊重』『安心感の構築』『自己統制力の育成』『心の受容』『体験の重視』と捉えられた。

調査研究1・2・3の結果から導き出した因子を、さらに要約、集約すると、基礎研究で見いだした視点と重なることが検証できた。

そこで本研究において、**視点1【体験の重視・活用】視点2【レジリエンス（自己統制力）の涵養】視点3【対人関係能力の育成】**を、設定した。

<調査問題4>は、子供たちには、将来このような「人」になって欲しい等、未来に期待することを、<調査問題5>は、子育て（保育）における悩みや、子育て（保育）をする上で学びたいこと等を、自由に記述してもらうようにした。

その自由記述を、テキストマイニング分析により、頻出語を抽出し、順位付けしたり、グループ分けしたりして、考察した。

保護者・保育者ともに、子供に期待することは、「思いやる・思いやり」が第1位であった。第2位以下は、保護者・保育者の願いに重なりは見られなかった。保護者の多くが子供たちに、人との「つながり」や「喜び」に満ち、「充実」した生活、「優しい・心」等を願い、「幸せ」を祈っていることが読み取れた。一方、保育者は、「自己肯定感や自信」を「育む」ことを「大切」に、「困難」なことにも「挑戦」してほしいと願っていることが読み取れた。共通した単語のスコアが高かったのは、「感謝」であり、温かな心を持ち、豊かな人間関係を築いて欲しいと願っていることが理解できた。

保護者・保育者の悩みや、学びたいこと等の自由記述を読み解くと、保護者は、子育てにおける不安や心配、時にはいらだち等の、自己の感情のコントロールに悩み、理想と現実のギャップに自分を責め、親の心の支援を要望していることが理解できた。保育者が、そのような保護者の心の支えになることができれば子供の健やかな成長につながる。しかし、保育経験年数の浅い、若い保育者にとっては、保護者からの要望が批難、批判に受け止められることもあり、保護者対応が一番の悩みであることも理解できた。現実には、保育士・幼稚園教諭養成課程の学生が、保護者対応に不安を抱き、進路を変更することは少なくない状況である。また、保育経験を重ねた、中堅保育者ほど、時代の要請と、自分自身の教育理念とに、相容れないものを感じているのも事実である。

両者がともに悩み、さらに問題解決のために学ぼうとしている志向に応える取組が、早急に必要であると考えた。

その後、保護者の聴き取り調査による文言及び、調査対象者の子供たちの、幼稚園・小学校時代の成長の足跡の一部を、本研究の視点1「体験の重視・設定」視点2「レジリエンスの涵養」視点3「対人関係能力の育成」を基に整理してみた。保護者の子供への願いや働き掛けによって、子供たちは各々、個性を発揮し、のびのびと成長していることが分析できたとともに、保護者の子供たちへの接し方、関わり方から多くのことに気付かされ、さらに生き方から学ばせてもらうこととなった。

道徳性の芽生えの醸成、並びに道徳性の育成に向け、今後の家庭教育や保護者支援の参考にするために、ポイントを整理し、具体化を図っていく指針を得ることができた。

【第3章 実践研究 要旨】

「感知融合」とは、感性と知性の2側面を融合した状態である。その状態を創造するには、アメリカ教育哲学のジョン・デューイのアプリシエーション (appreciation) の生成が重要である。アプリシエーションとは、デューイが『民主主義と教育』の中で、「しみじみと感じられる」、「真に理解する」と説明しているように、情意面 (感性) と認知面 (知性) の2側面を融合した状態である。

アプリシエーションの生成について、デューイは「能動的な面は『試みること (trying)』、受動的な面は『受け取ること (undergoing)』であり、能動と受動の間に均衡がない場合には、何も心の中には根付かない。自ら進んで対象に働き掛けを試みる (trying) からこそ、対象からの働き掛けを受容する (undergoing) ことができる。単なる受容ではなく、能動的な受容作用の繰り返し、情意面 (感性) と認知面 (知性) の2側面を融合した状態を創り出すのである。能動と受動の均衡のある連続でなければ、アプリシエーションの生成は望めない。」⁵としている。

「能動と受動の均衡のある連続」と、児童に求められる資質・能力の育成を目指した授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」を重ねて考察すると、アプリシエーションの生成には、3つの要素 (①体験、②探究、③表現) が重要だと考えられる。アプリシエーションは、この3つの要素が、バランスよく展開されることで生成される。①体験するからこそ探究(思考)につながり、②探究(思考)するからこそ表現は生まれ、また、③表現されたものを体験することによって、より質を高めることができる。

修士論文要旨

体験と探究(思考)は、表現によってスパイラルに連続し、この3つの要素をもつ活動は、相互補完関係を保ちながらアプリケーションを生成していくのである。

高橋史朗は、「感知融合の道德教育の6つの視点」と「主体的・対話的で深い学び」の関係性について次のように整理し提唱している。

- ・「感じる」、「気付く」、「見つめる」視点は、主体的な学び。
- ・「深める」、「対話する」視点は、対話的な学び。
- ・「協力し働き掛ける」視点は、深い学び。

このことを踏まえ、「感知融合の道德教育」の実践には、「6つの視点」と授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」を重ね合わせることが重要だと考え、下記のような学習指導過程を構想した。

- ・学習意欲の内発的動機付けとして「体験」を位置付けた学習指導過程
- ・子供の「問題意識」及び「問題解決」を授業づくりの核にした学習指導過程

次に、過去の実践を振り返り、筆者がこれまで取り組んできた「人権教育と関連させた道德教育の推進」「心に響く道德授業の充実」の研究実践を「感知融合の道德教育」として成立するかどうか見詰め直した。感知融合の道德教育の具体化を図るために以下の研究実践を、第2章で設定した本研究の視点【体験の重視・活用】【レジリエンス(自己統制力)の涵養】【対人関係能力の育成】から検証した。

研究実践Ⅰ 『人権教育と関連させた道德教育の推進』
～カリキュラム・マネジメント【横断的・系統的な指導】を通して～

- (1) 人権課題「障害者」を取り上げた横断的な指導の展開
- (2) 人権課題「外国人」を取り上げた横断的・系統的な指導の展開

研究実践Ⅱ 『心に響く道德授業の充実』
～授業の学習指導過程・指導方法の工夫を通して～

- (1) 感動教材の選択と音楽、詩等を活用した指導方法の工夫
- (2) 役割演技、グループワーク等を設定した学習指導過程の工夫

研究実践Ⅲ 『人権教育と関連させた道德教育の推進』
～カリキュラム・マネジメント【系統的な指導、家庭・地域との連携】を通して～

- (1) 「ホタル祭り」を核に据えた系統的な指導の展開
- (2) 「学校オリジナルカルタ作り」を通じた家庭と地域との連携

検証から得た課題を基に、感知融合の道德教育の具体化(活動及び道德科授業の開発)を図った。その内容は以下の通りである。

1 「感謝」の心の育成

～カリキュラム・マネジメントの充実を図り、横断的・系統的な指導を通して～

修士論文要旨

- (1) 幼児期の活動構想—お誕生日会を活かして
0～5歳児 「おたんじょうかい」活動例
 - (2) 児童期の授業構想—他教科や特別活動における体験と関連させて
 - ①第4学年 総合的な学習の時間実践例
単元名 「人にやさしい都市 TOKYO」 (全30時間)
 - ②第4学年 道徳科実践例 主題名 「心と心を結ぶリボン」 B礼儀
- 2 「感動する心・畏敬の念」の涵養 ～成功体験・感動体験を重ねて～
- (1) 幼児期の活動構想—季節の行事を活かして
4歳児 「体験入園する新入園児をたのませよう」活動例
 - (2) 児童期の授業構想—教材『花さき山』との感動的な出会いを活かして
 - ①幼児期(5歳児)及び児童期(低学年)に向けて 活動及び道徳科実践例
幻想的な世界を演出することで、お話の世界に浸らせて
 - ②児童期(中学年)に向けて 道徳科実践例
斎藤隆介の他の物語にも触れる機会を設けて
 - ③児童期(高学年)に向けて 道徳科実践例 2時間の授業を通して
 - (3) 児童期の授業構想—「感動」に焦点を当てた授業を重ねて
第4学年 道徳科実践例 主題名 「かけがえのない命」 D生命の尊さ

活動及び授業実践例の考察については、本論に記述した通りである。

【第4章 研究のまとめと課題 要旨】

1 成果

【先行研究からの課題の明確化】

- 先行研究を整理し、次の点を明らかにしたことである。
- ・科学的知見に基づいて、感と知を相互補完関係として捉え直し、知情意のバランスを図って感知融合の道徳教育を構築する必要があること
- ・感性及び感性教育の研究から、感性の育成が道徳教育に与える影響が大きいこと
- ・心理学的・脳科学的研究から、「認知的共感」と「感情的共感」の育成のバランス、及び脳の発達を理解した関わり方が重要であること
- ・いじめ等の問題行動と情動発達の関連が明確となり、研究と実践をつなぐプラットフォーム構築が望まれること
- ・知は、情や意を伴って初めて生きて働くものであるからこそ、予測不可能な時代には感知融合の教育が必要であること

【感知融合の道徳教育における、体験の重要性】

- 意図的・計画的に設定した体験から生まれた「気づき」一つ一つの感動や、活動を通して体得する「小さな成功体験」が積み重なる度に、自己肯定感を高め、次への意欲を高めることが明らかであった。このような体験を通し他者と関わる中で五感を使いながら、その子自身の「感性」が磨かれていくことも実感できた。さらに「感性」は、

他者と関わり、受け入れ認められる度にエネルギーとなり、その気持ちを誰かに伝えたい、表現したいという思いを強めることも、観察することができた。体験は、このように、「知性」の向上にもつながると捉えられた。

【体験の設定における、カリキュラム・マネジメント構築の有効性】

- 意図的・計画的にカリキュラム・マネジメントの構築を図ったことにより、主体的な学びの姿が見られた。さらに、横断的な指導を通して、ねらいとする価値に対する理解の深まりが見られ、道徳性を育んでいく過程において、カリキュラム・マネジメントの構築は、一定の成果を生み出したと考える。

【感知融合の道徳教育の具体化に向けた、効果的な手立ての明確化】

- 学習指導過程に、「6つの視点」を意図的に設定することで、活動や授業の場ごとのねらいを明確にすることができ、感知融合の道徳教育の具体化につながる。
- 感知融合の道徳教育を具体化するには、子供たちの脳と心に刻まれるリズム（律）の適切な導入とそれらを共有する人々との交流が有効である。

2 課題

- 現段階では、授業者が、学習指導過程に、意図的・計的に「6つの視点」を設定している。今後は、学習のねらい及び個々の実態に応じ、視点を選択し、学習指導過程に設定する等、汎用性が求められる。
- 本研究において、感知融合の道徳教育を評価する方法を確立するまでには研究を深めることができなかった。指導と評価は一体である。幼児期、児童期等、発達段階を考慮して、道徳的価値の内容項目を、認知的側面と情意的側面の両面で捉えて分析し、それに応じて評価方法及び評価基準を設定することは、重要である。
- 「道徳性の芽生え」と「認知的共感」「感情的共感」「道徳的実践意欲と態度」との関係、及び「道徳性の芽生え」と「非認知能力」「社会情動的スキル」との関係を、脳神経倫理学・認知心理学等との科学的知見に基づいて、より一層明確にする必要がある。
- 感情的共感を、スムーズに認知的共感に移行させ、情意面と認知面とを融合する指導方法をさらに考察し、保育者、教師に広く活用してもらえよう、浸透させる必要がある。

3 今後の展望

- 研究の目的に帰する「感知融合の道徳教育」の幼児期の活動及び児童期の授業開発と実践の成果検証を継続する。
- 本研究の成果を保育園・幼稚園・小学校等の保護者・保育者に還元するためにも、子育て支援となる活動を推進する。
- 道徳教育における保幼小の縦の接続と家庭・地域社会との横のつながりをいかに図るかは、今後の重要課題である。就学前の子供たちの家庭内外の育ちを支えていくために、科学的知見に基づく幼児教育・家庭教育の理論と実践を体系化する。

修士論文要旨

参考文献

- 安梅勅江 2019『子供の未来をひらくエンパワメント科学』日本評論社 6-20 頁
- 内田信子 2020『AIに負けない子育て～ことばは子どもの未来を拓く～』日本アセットマーケティング株式会社 39、44-54、60-65 頁
- 遠藤友麗 1997「いま、なぜ、感性教育か」高橋史朗編「感性教育」『現代のエスプリ』365号 至文堂 11-13、104、127、129 頁
- 汐見稔幸 2017『さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか』小学館 10-16、85-86、92、96、106-107 頁
- 高橋史朗 2020「感知融合の道德教育についての一考察」『道德教育学研究』創刊号記念論文 麗澤道德教育学会 17、18、24、25、29、30 頁
- 1996『感性を活かすホリスティック教育』広池出版 35-36 頁
- 2020「脳科学から道德教育を問い直す―新たな道德教育学の樹立を目指して(1)」モラロジー研究第84号 131 頁
- 中山理・水野修次郎 2012「感謝」『グローバル時代の幸福と社会的責任 日本のモラル、アメリカのモラル』麗澤大学出版会 156 頁
- 諸富祥彦 1999『どんな時も、人生に“YES”と言う』大和出版 102-152、106-113、146-152、154-250、242-250 頁
- 1997『フランクフル心理学入門 どんな時も人生には、意味がある』コスモス・ライブラリー 59-60、113-122、137-139、215-222 頁
- Andrew Zoll (アンドリュー・ゾリ) 2013『レジリエンス 復活力』ダイヤモンド社 167-168 頁
- James J. Heckman (ジェームズ・J・ヘックマン) 2015『幼児教育の経済学』東洋経済新報社 116-123 頁

論文要旨 註

- 1 貝塚茂樹『戦後日本と道德教育―教科化・教育勅語・愛国心』ミネルヴァ書房 2020 90 頁
- 2 高橋史朗「脳科学から道德教育を問い直す―新たな道德教育学の樹立を目指して(1)」モラロジー研究第84号 2020 131 頁
- 3 高橋史朗 「感知融合の道德教育についての一考察」『道德教育学研究』創刊号記念論文、麗澤道德教育学会、2020、24 頁
- 4 諸富祥彦『どんな時も、人生に“YES”と言う』大和出版 1999 106-113 頁
- 5 デューイ『ジョン・デューイ 鈴木康司訳『芸術論―経験としての芸術―』春秋社 1969 49 頁